

クヴェートリンブルクの参事会聖堂と ハーフティンバー家屋

— ドイツの世界遺産研究 その5 —

堀 内 正 昭

The Collegiate Church and the Half-timber Framed Buildings in Quedlinburg
—A Study on World Heritage in Germany, Part 5—

Masaaki HORIUCHI

Quedlinburg, in the state of Sachsen-Anhalt, was a capital of German kings and Holy Roman emperors at the time of the Saxonian ruling dynasty. The city had prospered as a trading town since the Middle Ages. The numerous high quality timber-framed buildings range from the 14th century to the Modern Ages. The variety of their construction methods and decoration makes Quedlinburg an exceptional example of a medieval German town. The author traces the architectural history of this town and is of the opinion that the Collegiate Church of St Servatius (c.1070–1129) is a faithful successor to Ottonian architectural style and an outstanding example of this type of building.

Key words: world heritage (世界遺産), Quedlinburg (クヴェートリンブルク),
half-timber (ハーフティンバー), Collegiate Church (参事会聖堂),
Romanesque (ロマネスク)

はじめに

筆者はこれまでに、ドイツの世界文化遺産であるアーヘン大聖堂、シュパイヤー大聖堂、ヒルデスハイムの聖ミハエル聖堂ならびに同大聖堂、そしてヴィース巡礼聖堂を取り上げ、その建築史的価値について考察してきた¹⁾。本稿では、クヴェートリンブルクの聖セルヴァティウス参事会聖堂とハーフティンバー家屋を取り上げる。

1994年、クヴェートリンブルクの諸建造物は文化遺産に関する登録基準のⅣに該当するものとして、ドイツでは14番目の世界遺産に登録された。まず、登録基準の内容を確認しておこう。

〔文化遺産の登録基準〕

Ⅳ：人類の歴史の重要な段階を物語る建築様式、あるいは建築的または技術的な集合体、あるいは景観に関する優れた見本であること。

この登録基準を念頭において、本稿では、当該建造物の建築史的価値をユネスコ世界遺産センター等が提供する情報を拠り所にして明らかにしていく。

1. ユネスコ世界遺産センターの情報

まず、ユネスコ・パリ本部にある世界遺産センターが提供する情報（英語）を紹介しよう²⁾。

「ザクセン＝アンハルト州にあるクヴェートリンブルクは、ザクセン朝（オットー朝）時代に東フラ

ンクのドイツ帝国の拠点のひとつであった。中世以降、商業地として繁栄した。数多くの質の高いハーフティンバー家屋は、当地を中世に由来するヨーロッパの都市の中でも特異なところになっている。聖セルヴァティウス参事会聖堂は、ロマネスク建築の傑作のひとつである。」(訳・下線筆者)

919年、東フランク王国(843-911)に代わって、ハインリヒ1世(在位:919-936)がドイツ王位についてザクセン朝の支配がはじまったときに、クヴェートリンブルクは王国を統治する拠点のひとつとなった。ザクセン朝2代目のオットー1世(在位:936-973)は、ドイツ王であるとともに、962年に皇帝の冠を戴いて神聖ローマ帝国が成立した。解説文中の「東フランクのドイツ帝国(East Franconian German Empire)」とは、この辺りの歴史を簡単に言い表そうとしたようであるが、やや不正確である。

また、同文中に出てくるハーフティンバーとは、土台、柱、貫、斜材などの木造骨組みを外部にあらわし、柱間を煉瓦、石あるいは土壁で埋めた造りのことで、ドイツ語ではファッハヴェルク(Fachwerk)という。

ユネスコ・パリ本部が提供する情報では、中世に由来するハーフティンバー家屋と聖セルヴァティウス参事会聖堂が特記されている。

次に、ドイツ・ユネスコ委員会が提供する情報(ドイツ語)にアクセスしてみよう。

2. ドイツ・ユネスコ委員会の情報

同委員会は、「クヴェートリンブルクの旧市街地区」と題して、次の情報を提供している。以下はその全訳である³⁾。

「クヴェートリンブルクは、ハルツ山地の東側にあるブロッケン山から魔女なら一とびのところに位置し、ひとつの城といくつかの入植地からなる“ヨーロッパ中世都市の傑出した例”である。1330年、旧市街と新市街はひとつの市壁で囲まれた二重の教区に統合された。かつての4つの教区と古いハーフティンバー家屋からなるこのまとまりのある都市の構成が、当地の性格を決定している。城山(Schloßberg)から、曲がり角の多い切妻の町並み

と一群の塔が見える。

6世紀にわたる約1300棟のハーフティンバー家屋とユーゲントシュティール建築をもつクヴェートリンブルクは、ドイツで最大級の面積を有する文化財(Flächendenkmäler)をもつ都市のひとつと見なされている。その歴史的な中心地区には、約800棟の家屋が建築記念物に指定されている。これらの大部分に当たる約80パーセントの建物は、その半々ずつがそれぞれ17世紀と18世紀に建てられた。

1545年から1597年の間に建てられた16棟のうちの15棟は旧市街にあり、その中に“アルター・クロプシュトック”がある。このハーフティンバー家屋の名前は、クヴェートリンブルクの有名な住人のひとりである頌詩作家(^{しやうしきさ}Odendichter)フリードリヒ・ゴットリーブ・クロプシュトックに由来している。

このクヴェートリンブルクの歴史的な中心地区は、大掛かりな修繕を必要としている。工場建築の誘致を目指したかつての東独における一方的な建設政策のせいで、ハーフティンバー家屋の保護はなおざりにされた。1989年秋の政変の時代に、市民たちの抵抗によって旧市街の北側で大規模に計画された破壊を食い止めることができた。

この破壊の阻止後、1990年に最初の修復事業が行われた。それ以来、助成政策によって数多くのハーフティンバー家屋が修復され、現代風に直された。これまでに約6億4000万マルクが修復費用として見積られている。

ユネスコは、クヴェートリンブルクの聖セルヴァティウス参事会聖堂を“ロマネスク建築上の傑作”と評価している。それは、ザクセンのオットー朝の目に見える証拠である。その創建時の建物の中に、ハインリヒ1世(936年)、後に王妃マティルデが埋葬された。アーヘンとハルバーシュタットと並んで、ここには中世の最も価値のある宝物が収められている。クヴェートリンブルクの旧市街は1994年にユネスコの世界遺産リストに登録された。」(訳・下線筆者)

ハルツは、ドイツ中央部、統一前であれば東西両ドイツにまたがる山地である。その最高峰ブロッケン山(1142m)から直線距離にして東に約36kmにク

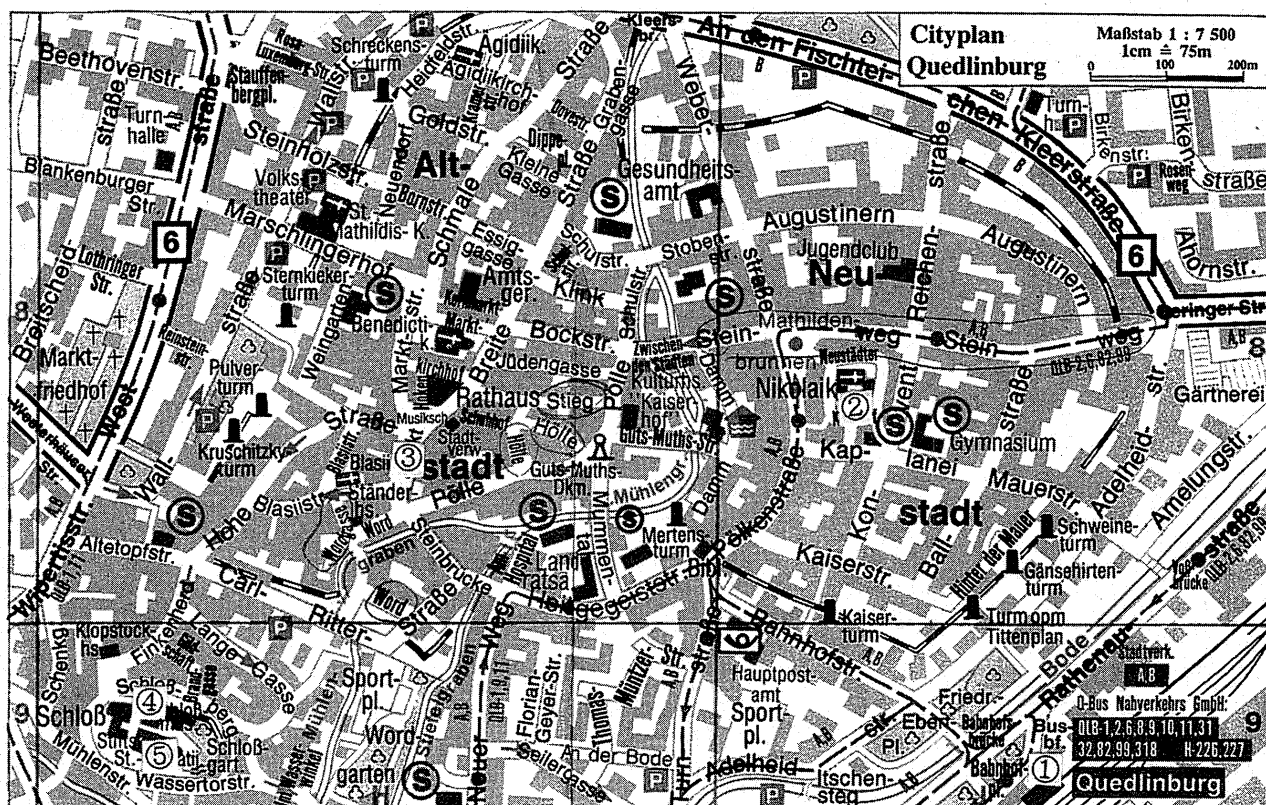


図1 クヴェートリンブルクの歴史的街区 (①駅 ②聖ニコライ聖堂 ③マルクト ④城山 ⑤聖セルヴァティウス参事会聖堂)



図2 城山に立つかつての歴代国王の居城(後に修道院)と聖セルヴァティウス参事会聖堂

ヴェートリンブルクがある。

筆者は1997年9月、ベルリンから鉄道を使って当

地までの日帰り旅行をした。ザクセン＝アンハルトの州都マグデブルクで乗り換えて、片道約3時間を要した。

クヴェートリンブルク駅の北側を流れるボーデ川を越えてバーンホーフ通りを行くと、1200年頃に成立した新市街に入る(図1)。この新市街の要に位置するのが、ゴシック様式による聖ニコライ聖堂で、ハレンキルヘ(広間型聖堂)の形式をもち、72mの塔を聳え立たせている。

この聖堂から西に行くと運河があり、そこを渡ると約1000年頃に成立した旧市街となる。この旧市街の中心にマルクト(中央広場)があり、そこから南西の方向に歩を進めれば城山に到る。

この城山に、歴代国王の居城と聖セルヴァティウス参事会聖堂が並び立っている(図2)。この居城は国王ハインリヒ1世の創建になるが、ハインリヒの没後、王妃マティルデは城山にザクセンの貴族の娘たちの教育のために女子修道院を創設した。そのため、居城はその後増改築を繰り返した⁴⁾。現在外観に見られる切妻破風は、16世紀のドイツ・ルネサンス様式によるものである。したがって、参事会

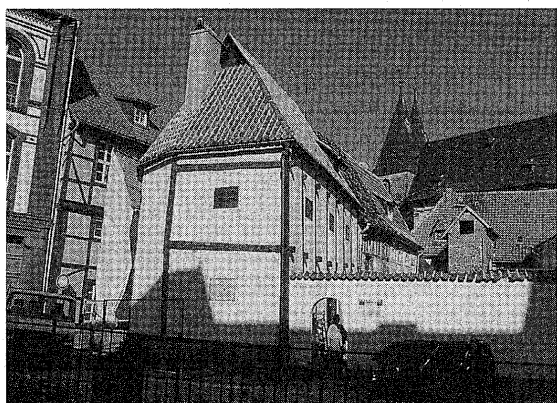


図3 クヴェートリンブルク最古の家屋（1400年頃あるいは1310年頃）
現在はハーフトィンバー博物館

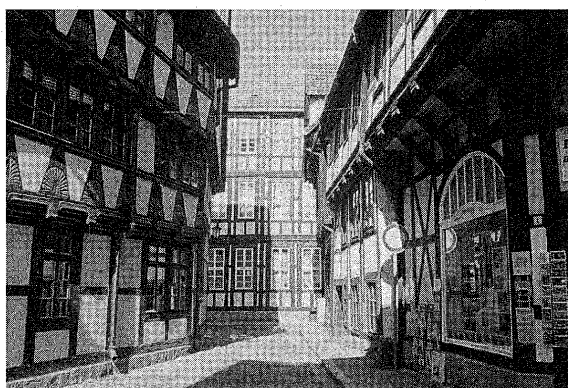


図4 シュティーク通りにある家屋で（写真の左），1564年に創建され，1605年と1633年に階層が増築

聖堂とはこの女子修道院の付属聖堂ということになる。

市の南西にあり辺りを一望できる城山から，マルクトのある旧市街，そして聖ニコライ聖堂のある新市街までの間に，ハーフトィンバー家屋が密集している。

3. ハーフトィンバー家屋について

ドイツ・ユネスコ委員会が提供する情報によれば，クヴェートリンブルクは「6世紀にわたる約1300棟のハーフトィンバー家屋」をもつとされる。つまり，当地には14～15世紀にまで遡れる家屋が存在するというのである。

クヴェートリンブルクで最古の家屋は，旧市街のマルクトの近くを流れる運河沿いにあり（番地はヴォルトガッセ3），それは1400年頃，あるいはさらに



図5 シュティーク通りにある家屋で，こちらは1580年に建設

遡って1310年頃のものと推定されている5）（図3）。

この建物は2階建てで，石基礎に置かれた土台から軒桁まで通し柱を用いて支えている。通し柱は，胴差しならびに2階梁とはホゾ差しで接合され，さらにホゾは栓止めされている。開口部は小さく，壁は漆喰で仕上げています。なお，この通し柱構造をもつ家屋は，城山の北側にあるフィンケンヘルド地区にも見られる。

しかし，15世紀中頃からは通し柱を用いず，各階を柱と桁で組み，下階に上階を積み重ねる技法が広まった6）。これを積層構造（あるいは敷桁構造）と呼んでいる。これにより，3階，4階建ての高層家屋がつくられるとともに，上階を下階より張り出させて床面積を広げることができた。

積層構造による代表的な家屋の例を挙げよう。それは，マルクトにある市庁舎から東に伸びるシュティーク通りにあり，3件の家屋が同じ技法と装飾をもって連続している。そのなかの古いものは1564年に創建され，1605年と1633年に階層が増築されている（図4）。2階に出窓をもつ家屋は1580年に建てられている7）（図5）。

先のドイツ・ユネスコ委員会の情報のなかに，ハーフトィンバー家屋の例として「アルター・クロプシュトック」という固有名詞で紹介されていた建物があったが，このシュティーク通りにある家屋がそれである。フリードリヒ・ゴットリープ・クロプシュトック（1724～1803）はクヴェートリンブルク生まれの詩人で，キリストの受難と復活ならびに昇天を題材にした宗教的叙事詩『救世主』（1748～73）



図6 シュタインヴェーク通りに1671年に建てられた家屋



図7 聖セルヴァティウス参事会聖堂の堂内（身廊部から東側内陣を見る）

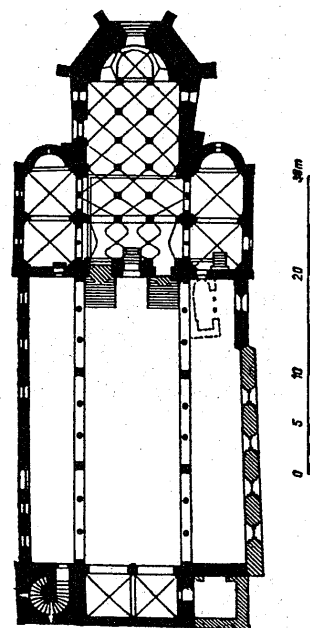


図8 聖セルヴァティウス参事会聖堂の平面図

が代表作とされる。

同家屋の名は、この「フリードリヒ・ゴットリーブ・クロプシュトックに由来している」と説明されていたが、実際に関係していたのはクロプシュトックの従兄弟ゲオルク・ヴィルヘルムであり、彼は1744年から1777年までこの家屋を所有していた⁸⁾。

その後、積層構造の技法自体にほとんど変化はなかったとされる。ハーフティンバー家屋の魅力はその装飾を含んだ細部にあるので、時代による変化について概略しておこう⁹⁾。

1530年頃までは、張り出した上階の出し桁周辺に繰り方の細工が施され、銘が刻み込まれたりした。それ以後1630年頃までは、出し桁周辺の彫り込みが深くなり、出し桁を受ける梁の小口にロゼット（バラ形装飾）やパルメット装飾が施され始めた。この種の装飾は、1600年以降に上階の腰壁を飾りはじめ、装飾性豊かな外観をもつようになったとされる。アルター・クロプシュトックの家がその好例である。

さらに、17世紀後半には梁の小口がピラミッド状に加工されるようになったとされる。例えば、聖ニコライ聖堂の北側にあるシュタインヴェーク通りに1671年に建てられた家屋が現存する（図6）。この

家屋は3階建ての上に屋階をもつ積層構造で、出し桁に繰り方が施され、銘が彫られているほか、梁の小口付近はピラミッド状に加工されているのがわかる。

こうした造形への好みは1760年頃まで続いたが、18世紀後半には煉瓦壁に上塗りが施されることが多くなり、様々な装飾による造形は見られなくなっていく。

4. 聖セルヴァティウス参事会聖堂について

聖セルヴァティウス参事会聖堂のクリプト（地下祭室）には、ドイツ最初の王ハインリヒ1世と王妃マティルデが埋葬されている。現在の参事会聖堂は建物としては4代目で、教会堂そのものは850年頃に創建されていた¹⁰⁾。2代目は王妃マティルデが女子修道院の付属聖堂として建てさせたもので、10世紀の中頃に竣工している。3代目はオットー3世の娘である大修道院長のマティルデが着手したもので、身廊部は997年に完成し、1021年に献堂式が行われている。しかし、この3代目の聖堂は1070年の大火で焼失してしまった。すぐさま再建に着手したが、政治的な混乱が工事を遅らせ、ようやく1129年

に完成している。

参事会聖堂の身廊部に入ると、身廊と側廊との境の、太い角柱と角柱の間に、ロマネスク様式の柱頭をもつ円柱が2本ずつ配置されている(図7)。平面図で確認すると、南北に配置された4本の角柱は正方形をつくり、それが3つ連続して身廊部を形成していることがわかる(図8)。身廊から東の内陣方向を見ると、高祭壇となり、東西南北に横断アーチが入った正方形平面をもつ交差部がある。実は、この交差部の平面を基準にして、身廊部がつくられているのである。

身廊部、交差部、さらに東端のアプスを含めて、すべてが平天井で、柱頭の装飾、高窓の下を走る装飾帯以外には、目だったアクセントの無い質素なつくりである。

他方、高祭壇の下のクリプトには、東西方向に2本の円柱が並び、交差ヴォールトの石造天井が架けられている。

身廊部はそのままであるが、それ以外のところでは改造がなされた。1320年に、内陣部分がゴシック様式で造り直されたのである。改築に際して、尖頭アーチの窓が設けられ、バットレス(控え壁)が付けられた。1571年には南側袖廊の壁が造り直され、1708年には身廊部南側の壁が倒壊したので1711年にこれを直している。1862年から1882年に大規模な改修がなされ、その際外観の南側の塔が補修された。

こうした改修のなかで、もっとも注目されるのは、1936年から42年にかけて行われた改修工事であろう。当時政権を握っていたナチスはハインリヒ1世をドイツ帝国の始祖として祭り上げたため、ゴシック様式からロマネスク様式への変更を行ったのだ。われわれが見ているのは、14世紀のゴシック様式の内陣をロマネスク風に直した内陣なのである。なお、第2次世界大戦では双塔に損傷を受け、改修に際して急傾斜の屋根がピラミッド型のものに改められている。

5. 参事会聖堂の建築史的価値について

聖堂の交差部を基準にして身廊部をつくる構想、そして身廊部を角柱と円柱でつくる「支柱交替」は、



図9 ヒルデスハイムの聖ミヒャエル聖堂
(身廊部から東側内陣を見る)

オットー朝時代に現れた重要な設計手法である。

筆者は先にドイツの世界遺産として、ヒルデスハイムの聖ミヒャエル聖堂(1010-1020)を取り上げた(図9)。その際に、次のような価値付けを行った¹¹⁾。

「聖ミヒャエル聖堂は、カロリング朝に由来する二重内陣と2袖廊をもちながら、オットー朝時代に現れた支柱交替を、交差部を基準にしたプランのもとで採用した最初の建築であった...これまでのバシリカ式とは異なる構成手法を示し、次のザリエル朝で本格化するロマネスク建築の先鞭をつける教会堂である...同聖堂は、シュパイヤー大聖堂に到るロマネスク建築成立の前史を物語るオットー朝期の稀少な建築なのである。」

先に紹介したように、ドイツ・ユネスコ委員会は、聖セルヴァティウス参事会聖堂を「ロマネスク建築上の傑作」であり、それは、「オットー朝の目に見える証拠」とであると評価している。

世界文化遺産の登録基準には「I. 人間の創造的才能を表す傑作であること」という項目がある。しかし、参事会聖堂にはこの基準が適応されていない。オットー朝期の11世紀初期に建造された聖ミヒャエ

ル聖堂と比べると、1129年竣工の参事会聖堂は約1世紀遅れて建てられた。さらに、同聖堂は、支柱交替をもち、かつ全石造化を果たしたシュパイヤー大聖堂（第1期工事は1025-1061年、第2期工事は1082-1106年）と比べても遅い。そもそも、参事会聖堂はオットー朝期に属してはいないのである。

したがって、参事会聖堂の価値を同じ建築様式を持つ同時代の類例建築と比較した上で計ることはできない。同聖堂をオットー朝期の傑作とするわけにはいかないのだ。ただ、聖ミヒャエル聖堂はその後改造され、戦火による大きな損傷を受けた後で復原されているのに対して、参事会聖堂ははるかに改変が少ない。そこに最大の価値が見出せる。

結 語

クヴェートリンブルクのハーフティンバー家屋に見られる積層構造とそれにとまなう装飾は、ニーダーザクセン（ブラウンシュヴァイク、ハーメルン、ツェレなど）の諸都市に見られる同種の木造家屋と共通している。クヴェートリンブルクの場合は、現在から14～15世紀にまで遡れるハーフティンバーの家屋が質量共に保存され、その歴史が近代に到るまで通時的に体験できるところに大きな価値がある。

他方、聖セルヴァティウス参事会聖堂は、オットー朝の建築様式の忠実な後継者と言える。オリジナルな状態を尊重する文化財的な観点に立てば、参事会聖堂は、確かにオットー朝の建築様式のすぐれた見本なのである。

註

- 1) 堀内正昭：世界遺産のインターネット情報について～ドイツの世界遺産に関する研究 その1、「学苑」環境文化紀要、第711号、平成11年7月、pp.62-72/シュパイヤー大聖堂～ドイツの世界遺産に関する研究 その2、「学苑」環境文化紀要、第722号、平成12年7月、pp.49-59/ヒルデスハイムの聖ミヒャエル聖堂と大聖堂～ドイツの世界遺産に関する研究 その3、「学苑」環境文化紀要、第722号、平成12年7月、pp.60-69/ヴィース巡礼聖堂～ドイツの世界遺産に関する研究 その4、「学苑」環境文化紀要、第733号、平成13

年7月、pp.33-45

- 2) ユネスコ・パリ本部の世界遺産センター提供のクヴェートリンブルクへのアドレスは次の通り。
<http://whc.unesco.org/sites/535.htm>
- 3) ドイツ・ユネスコ委員会提供のクヴェートリンブルクへのアドレスは次の通り。
http://www.unesco.de/c_arbeitsgebiete/welterbe_d14.htm
- 4) クヴェートリンブルクの歴史については、次の文献を参照。Hoffmann, W., Quedlinburg Ein Führer durch die Weltkulturerbe-Stadt, Schmidt-Buch-Verlag, Wernigerode, 1994.
- 5) この家屋を1400年頃とするのは、Hoffmann, W., Quedlinburg（前掲書）であり、1310年頃とするのは、クヴェートリンブルク市が提供する情報「市の公開文化財リスト」による。
<http://www.quedlinburg-regio.de/denkmal/2004/default.htm>
- 6) ハーフティンバー家屋の技法については、Hoffmann, W., Quedlinburg（前掲書）、pp.35-38。太田邦夫：ドイツの木構造の発達と都市の高層化の過程、季刊カラム No.80, 1981, pp.21-26.
- 7) 8) 参照。Deutsche Kunstdenkmäler Sachsen-Anhalt, Bayreuth, 1993, p.460
- 9) Hoffmann, W., Quedlinburg（前掲書）、p.38
- 10) 聖セルヴァティウス参事会聖堂の歴史については、Rienäcker, C., St. Servatius in Quedlinburg, Deutscher Kunstverlag, München Belin, 1996
- 11) 堀内正昭：ヒルデスハイムの聖ミヒャエル聖堂と大聖堂～ドイツの世界遺産に関する研究 その3、「学苑」環境文化紀要、第722号、平成12年7月、pp.60-69

図版出典

- 図1: Stadtplan Quedlinburg, ADAC Verlag, 1997
図2～図6, 図9: 筆者撮影
図7: クヴェートリンブルク城博物館提供
図8: Rienäcker, C., St. Servatius in Quedlinburg, Deutscher Kunstverlag, München Belin, 1996.

（ほりうち まさあき 生活文化学科）